

母源高明女嬪子、後いさせ給へり、その車のそでくちかずも去らずおほくかさなりかッやけ  
爲小一條院女御、後いさせ給へり、その車のそでくちかずも去らずおほくかさなりかッやけ  
り、みかど童におはしませば、大宮原彰子、御輿にたてまつりたれば、其ぼとまねびやらんかた  
なくめでたし、

〔台記〕康治元年十月廿六日、今日大嘗會御禊也、予藤原賴長、養女多女御代、子細具別記、

〔五代帝王物語〕主上堀河は、貞應元年正月二日御元服、御年十一、中宮には、はじめに三條太政大臣

公房公の女、安喜門院藤原御禊の女御代に参りたりしが、やがて貞應元年十二月十七日女御

として、同二年二月に立后、嘉祿二年七月に皇后宮とす、

〔女院小傳〕京極院藤原信子、龜山后、後宇多母、左大臣實雄一女、母從二位藤榮子、文應元、十二、十一爲女

御代六十二月七日叙從三位、廿五爲女御、

〔大嘗會御禊事〕後二條 正安三年十月二十八日甲午、女御代右大臣公孝女實故内府

當今園花 延慶二年十月二十一日、女御代太政大臣信嗣女實權中納言冬氏卿女

〔榮花物語日隆の蘿〕さて世中には、けふあすきさきた、せ給べしとのみいふは、かんのどの子妍

にや、またせんようでん子城にやとも申めり、かゝるほどに宣耀殿に、うち條三より、

はるがすみのべに、たつらんと思へどもおぼつかなさへだてつるかな、ときこえさせ給へ

れば、御かへし、

かすむめるそらのけしきはそれながらわがみひとつのあらずもあるかな、ときこえさせ給

へれば、あはれとおぼしめさる、

〔長秋記〕長承三年三月二日壬子、以院鳥女御藤原叙從四位下、有准三宮宣旨、來八日可立后兼

宣旨、十九日可有宣命事云々、略中 太上皇鳥以夫人立后例未聞者、略下

○按ズルニ、此ハ女御ヲ指シテ夫人ト稱セリ、